

# 脳卒中乗り越え 公演の指揮台へ

北海道吹奏楽プロジェクト代表・畠中さん

札幌市西区の建築家で、プロとアマチュアの音楽家約60人の「北海道吹奏楽プロジェクト」を率いる畠中秀幸さん(42)が、昨年5月の脳卒中による右半身まひを乗り越え、公演の指揮台に復帰する。同プロジェクトが2月3、4の両日、西区の「ちえりあホール」で開く演奏会「北海道吹奏楽フェスティバル」。当日は、左手の動きに加え、目と目で察し合うアイコンタクトで、ハーモニーを生み出す。(上田貴子)



「6小節目、もうちょっとクレッシェンド(次第に強く)に」。22日夜、同ホールでのリハーサル。畠中さんは、指揮台後方のパースに寄りかかるような姿勢で立ち、約30人の演奏者に指示した。

9歳からフルートを習い、高校のころまでは音楽家を目指していた。札幌北高、京都大を経て、1級建築士となり札幌の建築事務所勤務。札幌ドームの設計にも携わった。その一方で、音楽仲間と吹奏楽コンサートを開いた。

建築と音楽に、常に同じくらい情熱を傾けてきた。8年前に西区発寒に自らの建築事務所を開業し、3年前には「札幌の吹奏楽の底上げを」と、吹奏楽プロジェクトを旗揚げして代表になった。

倒れたのは昨年5月、同プロジェクトが練習していた東区の中学校。具合が悪くなり、指揮台から降りた直後に倒れた。感覚がおかしくなり、天井が間近に見えた。「俺、死ぬのかな」。すぐに病院に運ばれ治療を受けたが、右半身は全く動かなくなっていた。

8月にはつえをついて練習を見学し、9月には左手で指揮をした。妻でプロジェクトメンバーのさおりさんは、目を輝かせる。入場料などの問い合わせは、スタジオ・シンフォニカ ☎215・6400へ。

## 「仲間と再び」支えに

### 左手と目で音色つむぐ

来月3、4日



指揮台に再び立とうとリハビリに励んだ畠中さん。吹奏楽フェスティバルでは左手で指揮をする(小室泰規撮影)

した病院の医師は、「普通の患者に比べ、かなり早い回復だった」と話す。リハビリ病院を昨年末に退院。今は、ゆっくり歩けるようになり、軽く握手もできる。左手だけの指揮に、メンバーは畠中さんの視線や表情から演奏のタイミングを計るようになり、アマチュア団員のリーダーの佐藤和幸さんは「彼を中心に一層結束するようになった」と、畠中さんの復帰を喜ぶ。

演奏会は、3日は午後7時からプロと音大生がチャイコフスキーなどの曲を、4日は同3時半から高校生から社会人までのアマチュアとプロが吹奏楽の名曲を演奏する。「病氣だからこの程度で済ませるといってはななく、『左手だけでもなかなかおもしろい』と思われる演奏を仲間と披露したい」。畠中さんは目を輝かせる。入場料などの問い合わせは、スタジオ・シンフォニカ ☎215・6400へ。